日本福祉大学 全学教育開発機構 報告誌

きょうゆう

第２号

2009年3月

全学教育開発機構主催全学ＦＤ推進事業

きょうゆうサロン報告（第３回・第４回）

第３回きょうゆうサロン

「大学生、はじめの一歩」

～自身の学生生活を１年次から振り返って～

2008年11月20日（木）18:00～20:30

第２回きょうゆうサロン連携企画

「知多半島の醸造現場めぐり」

2009年2月16日（月）9:50～16:00

第４回きょうゆうサロン

「読み、書き、日本語」～言葉をつかう面白さ～

2009年2月26日（木）18:00～20:30

日本福祉大学

全学教育開発機構

「きょうゆう」誌について

この度、全学教育開発機構では、「きょうゆう」第１号に引続き第２号を発行することにいたしました。これは、機構の活動や教育改革の諸課題などについて、主に学内の教職員のみなさんに報告するための冊子です。

誌名の「きょうゆう」とは、２００８年２月より開催しています「きょうゆうサロン」にて使用している言葉ですが、教育に関するさまざまな実践などを「共有」するという意味、本学の教育に携わる教員や職員のコミュニケーションを促進していく「教友」といった意味を兼ね備えたものです。以前より、教職課程で、先生方が学生を指導するために組織された「教友ゼミ」にて使われてきた言葉であり、それを使用させていただいております。

今号につきましては、この間に開催いたしました第３回と第４回の「きょうゆうサロン」と連携企画で実施した「知多半島の醸造現場めぐり」の報告集という形で発行いたします。今後も機構主催のイベント等の報告のみならず、教育改革や教育実践などのさまざまな事例報告、文部科学省などの大学教育に関する政策動向など、さまざまな特集を組んで、本学の新しい大学づくり、教育づくりに貢献するような冊子にしたいと考えておりますので、何卒宜しくお願い申し上げます。

2009/3　全学教育開発機構

目　　　次

１．第３回きょうゆうサロン「大学生、はじめの一歩」

開催概要　6
話題提供
①「たくさんの刺激を与えてくれる学科の仲間たち」　7
～自身の学生生活を１年次から振り返って～
②「学生の新生活を支えた25年」　8
③「日本福祉大学の１年生、その支援のあり方を探る」　9
参加者の感想　10

２．第２回きょうゆうサロン連携企画「知多半島の醸造現場めぐり」

開催概要　12
知多半島の醸造業について　13
醸造現場
見学先①　合資会社丸又商店　14
見学先②　南蔵商店株式会社　15
見学先③　澤田酒造株式会社　16
参加者の感想　17
新聞記事　18

３．第４回きょうゆうサロン「読み、書き、日本語」

開催概要　20
実践報告
①「秋庭ゼミのゼミ事情」　21
②「詩の心・言葉をつないで」　22
状況報告
「福祉大生の読書事情」　23
実践報告
③「日本福祉大学の１年生、その支援のあり方を探る」　24
参加者の感想　26

４．きょうゆうサロン当日配布資料　28

編集後記

１．第３回きょうゆうサロン
「大学生、はじめの一歩」開催報告

開催概要

開催内容

テーマ　：　「大学生、はじめの一歩」～自身の学生生活を１年次から振り返って～
開催日時　：　２００８年１１月２０日（木）１８：００～２０：３０
開催場所　：　美浜キャンパスコミセン（１１号館）１階
主催　：　全学教育開発機構／学生生活総合支援機構
司　会　：　中村信次　教育デザイン研究室長
内　容
18:00　挨拶　中村信次　教育デザイン研究室長
18:05　話題提供①　「たくさんの刺激を与えてくれる学科の仲間たち」
～自身の学生生活を１年次から振り返って～
松島周平　福祉経営学部国際福祉開発マネジメント学科４年
18:30　話題提供②　「学生の新生活を支えた２５年」
都築長武さん　美浜町日本福祉大学家主組合
田島裕次さん　美浜町日本福祉大学家主組合
19:00　話題提供③　「日本福祉大学の１年生、その支援のあり方を探る」
山本秀人　学生生活総合支援機構長
19:30　質疑応答・懇談（軽食を交えながら）
20:30　終了

参加状況

全参加者数　４６名（報告者含む）
社会福祉学部教員 2名、経済学部教員 1名、福祉経営学部教員 3名、子ども発達学部教員 5名
国際福祉開発学部教員 2名、職員 19名、学生 14名

開催のねらいと評価

今回の「きょうゆうサロン」は、初年次教育を多面的に捉えることをねらいとして開催した。そのため、学生生活総合支援機構の共催を得て、教職員のみならず、学生や学生をよく理解している地域の人たち（美浜町の家主さん）も交えての開催とし、相互の意見交換と交流の促進もねらうこととした。

これらの報告を受け、参加者からは次のような感想・質問が出された。松島さんの報告に対しては、多くの人に支えられながら意識的に成長をなしとげたことへの共感とともに、具体的に英語力をどのように伸ばしたのかといった質問も出された。家主組合の報告には、「下宿での家主さんとの関わりが、学生の社会勉強につながる」「きめ細かいサポートで安心感して下宿できる」といった感想が寄せられた。また、かつて下宿生であった職員からは当時の回想とともに、下宿生活自体の持つ教育力の高さを認める意見などが出された。山本機構長の報告内容に対しては、「自身が元気層や中間層のどこに入るのか考えさせられた」など、学生からも感想が出されていた。

このように、今回のきょうゆうサロンは、初年次学生への教育・支援のあり方に対して関心を向ける機会となるとともに、立場の違う参加者間のコミュニケーションを促進することができたといえる。初年次教育を立場の違う視点で多面的に捉え、情報共有するというねらいについては、一定の成果をあげたものと思う。また、軽食を交えた懇談を通し、学生、家主さん、教職員相互の初年次教育の認識を深め、学生や地域の方を巻き込んだ交流をはかることができたものと考える。さらに、家主組合からの報告の中で、電話など学生とのコミュニケーション手段の変遷が紹介されるとともに、学生と家主さんがどのようなコミュニケーションをとっているのか認識できたことも成果の一つに数えてよいだろう。

話題提供①「たくさんの刺激を与えてくれる仲間たち」
～自身の学生生活を１年次から振り返って～

松島周平　福祉経営学部国際福祉マネジメント学科４年

私自身こういった場でお話させていただくことは、初めてです。とても緊張していますがよろしくお願いします。
今日の話題提供の内容
　私自身の経験を１年次から振り返ると…
　①日本福祉大学を選んだ理由
　②学科の仲間たちの活躍
　　＝私にとって驚きの連続
　③海外でのボランティア体験
　　　　についてお話させていただきます。
日本福祉大学を選んだ理由
　最初にお話させていただく内容は、「日本福祉大学を選んだ理由」です。実のところ私は、オープンキャンパスが開催されていても入試まで美浜キャンパスに来たことがありませんでした。入試で美浜キャンパスに向かう中、電車から外を眺めていると徐序に自然豊かな景色が広がっており、こういった自然に囲まれた環境で学べることは、良いことだと感じました。その後、試験結果の通知をいただき開封してみると、その中に当時の学部長から授業料を半分にしてもらえるという心のこもった主旨のお手紙が入っていました。

大学に入ってからは、さまざまな出会いがあり、私は、学科の仲間たちの意識の高さに驚きました。彼らは、自らの想いを学外でもかたちにできる仲間だったのです。こういった仲間と過ごした１年生、２年生は、私の大学生活にとって貴重な時間になっていたかと思います。
一方、正課授業については、教科書をひたすら読む授業スタイルもありますが、先生の経験に裏付けられた授業もあり、学生のモチベーションに働きかけてくれる授業の存在がありました。その授業の存在が、私に大きく影響を与えマレーシアに行くことにつながっていくのです。資料にあります「仲間の活躍」の写真は、学園祭でのワークショップの様子です。ワークショップをとおして私は、途上国でバナナを生産している人たちの裏側に貧困があることを知るとともに仲間の実践的な取組みに刺激を受け「マレーシアに行ってインターンをやってみたい」と思うようになりました。

海外でインターンをおこなうには、現地の方に連絡する必要があります。現地と連絡をとるために、英語の辞書を片手にメールを送った記憶があります。そして、福祉大院生のマレーシアで活躍されている方の協力を得られるなど福祉大のネットワークにも助けられました。
計画を具体化しようとした時、予算的な問題を解決しておく必要があった。この点を国際交流課に相談したところマレーシアの現地に受入拠点があり費用が、あまりかからない方法をとることができ、トントン拍子で話が進んでいったのです。
こちらの写真は、マレーシアでの写真です。マレーシアのペナン島で障がいをもった方や高齢者と共に皆が暮らしよい地域づくりを実践している団体でお手伝いをさせていただきました。現地のNGOの方と行動を共にして、さまざまな問題を抱えながら収入を得、家族を支えている姿を目の当たりにすることができました。

最後に日本福祉大学で過ごした４年間で、クラスメートをはじめとする人とのつながりや大学の持つネットワークを活用できたことが、学生生活を充実することができた大きな要因です

話題提供②「学生の新生活を支えた２５年」

都築長武　美浜町日本福祉大学家主組合
田島裕二　美浜町日本福祉大学家主組合

都築長武氏より

私たち美浜町の家主組合は、２５年前に日本福祉大学の移転にあわせて、良い町づくりをしたいと考え下宿を立ち上げました。現在では、大家が５８名、部屋数が１６００程度になっています。私たちは、学生さんに対してただ単に部屋を貸しているのではなく、ご両親から学生さんをお預かりしているという意識を持って学生さんの支援をしております。

２５年前と一番大きく変わったことは、電話です。当時は、携帯電話も無くピンク電話がアパートに１～２台あり、電話が鳴ったら近くにいる人が受け、他の部屋まで呼び出しに行っていました。次の世代の電話は、ホテルにあるような内線電話タイプのものでした。部屋の電話が鳴ったら、受話器を取って電話交換手のようなことをやっていました。現在では、携帯電話となり我々としては大変便利な機器として利用しています。学生さんとのやりとりは、電話で連絡するより、携帯メールのほう確実です。メールなら学生さんからの反応は、早い人で数分後、遅い人でも数時間後に連絡があります。学生さんへの通知について昔と比較すると紙での配布が、メールでの配信に変わり、学生さんからの期日までの回答が３割程度のものが、今ではほとんど期日までに回答があります。

その他には下宿の施設は、大学が移転した当時から、部屋毎にトイレや風呂が付き１Ｋが基本的な下宿のかたちになっていました。設備の変化として、現在では、インターネットが下宿で利用できるようになっています。学生さんは、和室より洋室を好むようになり、アルバイトなどに利用するために車を所有する学生さんが増えました。

田島裕二氏より

パート生活に対する心構えと学生間の交流を目的に開いております。また、社会での人間関係や協調性を身につけるためにアルバイトやサークルに取組むことを勧めています。入学式の朝は、スーツが基本ですのでネクタイの結び方を説明し、アパートの入口で新入生全員の集合写真を撮る機会を毎年設けております。撮った写真は、全ての親御さんにお送りしており、いつも感謝のお返事をいただております。このような積み重ねが親御さんとの信頼関係を築き、大学の指定アパートとしての責任も果たせるもので今後も積み重ねていきたいと考えています。家主の課題は、普段からアパートの学生さんとのコミュニケーションをはかり少しの変化も見逃さないことだと考え、学生さんが、グループで夜中に騒いでいると指導を入れることもあります。私は、学生さんを社会人の一員として期待していることがあります。ひとつは、ゴミの問題で学生さんには、家電製品をはじめとする、不法投棄など近隣住民に迷惑にならないように社会のルールに沿って行動していただきたいと思います。もうひとつは、学生生活基盤であるアパートの家賃滞納をされる学生さんがごくわずかですが存在します。契約書を交わしている以上、やむを得ない事情を除いて社会では通用しませんので、社会人として当たり前のことを当たり前にこなして欲しいと思います。

この２５年間には、都築さんのお話にありましたように電話が進化しています。１０年～１５年前には、ポケットベルの特有の表現（０８４０＝おはよう）で一日がはじまっていたと記憶しています。そしてＰＨＳ～携帯電話の時代です。画面は、白黒から色彩豊かになっていきました。現代では、電話にデジカメ機能も付き小型ネットマシンです。その後ＰＣの役割も就職活動では不可欠となり、高性能で小型軽量化が常にユーザーから求められ、メーカーの競争も激化しています。２００９年４月からは、地元のケーブルネットワークの協力を得て、指定アパート全室でインターネットが完備されます。インターネット接続は、学生生活に必要と感じており、情報検索やオンデマンド授業受講などができるようになります。

地域と密着した学生の指定アパートは、全国的に珍しいもので、ヤフーで”指定アパート”と入力して検索をおこなうと検索順位が１位となっています。指定アパートの卒業生には、この指定アパートを選んでよかったと思える組織づくりを今後も追及していきたいと考えています。

話題提供③「日本福祉大学の１年生、その支援のあり方を探る」

山本秀人　学生生活総合支援機構長

私も赴任して２５年になりますので感慨深く家主さんのお話を聞いていました。また、松島さんから、意識の高い学生がまわりにいたと聞いて、学部の仲間がみんなこうなってくれれば良いなと感じました。

高校を卒業して１年目は、非常に重要な時期で、大学４年間をすごすための知識や技能を身に付けることが重要だと考えています。具体的には、読み書き、メモのとり方、要約の仕方などです。私の担当する授業で、このような能力を身に付ける必要のある学生がめだちはじめました。

学生生活総合支援機構では、学生リーダーやピアサポート学生の養成が非常に大切だと考えており、この間、日本福祉大学の学生像を各学部教員の視点から捉えてきました。その中で、学部の先生から必ず、「やさしい」（押しの弱さ）といったキーワードが出てきます。本学の学生像として、「やさしい」（押しの弱さ）＝「自分の意見を述べる」「表現すること」が苦手だと捕らえることができます。

私は、書き言葉を獲得し、論理的思考が芽生え、自治集団としてのクラス運営などを考えはじめる小学校３，４年生の時期が非常に重要だと考えています。この時期に大きな発達の節が存在しているといわれています。このような時期をのりこえて大学生となっているわけですが、本学の集団がどうなっているかという点を気にしています。集団には、目的や課題が強制的に与えられる管理主義的集団や心理的一体感のみによって結ばれた適応主義的集団、自分達の手で民主的に統治する自治的集団が存在しますが、本学の今の学生集団には、管理主義的集団が存在すると思っています。

これまで学生生活総合支援機構では、学生を招いて他学部の学生をどのように見ているかについて聞いたことがあります。ここで学生が望んでいたことは、他学部と交流をおこなうことでした。ですから、学部を越えた教養教育や学部横断的なクラス・ゼミを設け学部間で学生が交流できるしかけが必要だと思います。他には、プレゼンテーションをおこなう機会をクラス・ゼミに設け、プレゼンテーション能力を伸ばすことやインターンシップの充実などが学生から求められています。

愛媛大学の秦先生の「新時代の学生リーダー養成プログラム」や立命館大学の岡本先生の「学生支援の課題」を参考にして、本学学生を捉えてみました。第１層としての元気層では、学生リーダーやピアリーダーの役割が期待できます。その一方で、元気層がいろいろな集団の中で平均的な学生層と比較して、浮いてしまうのではないかと考えています。第２層としての中間層の学生から、講義がはじまって２週目の授業で「なぜ、自分がここにいるのかわからない」と話しをされたことがあり、この中間層も２極化するのではないかと感じています。第３層としてのしんどい層の学生に対しての支援は、学生による支援では困難であるため専門的な支援が必要になります。

学生像の分析をすすめる中で、正課教育の中に意図的に学生リーダー養成プログラムを組込む必要があると考えています。社会福祉学部の春季セミナーでは、毎年アシスタント会議を組織していますが、春季セミナーが終るとそれまでの活動も終ってしまいます。学生リーダー養成のために毎年のアシスタント会議の中にプログラムを組込んで、クラス・ゼミをサポートする協議会を組織化する必要性を感じています。オリター制度やきょうだいクラスなど、私が赴任した時にあったしくみを復活したいと考えております。

課外活動についてもリーダー養成は、重要なもので充実・拡大していく必要があります。また、ピアサポートの準備会設置を進めたいと考えております。学生生活全体に関わるところは、学生や教職員が共同していくことが重要だと考えます。

参加者の感想

【教職員】

◎きょうゆうサロンに対する意見・感想

・家主さんが学生に連絡を取る上で利用している手段で、携帯電話にメールを送るとすぐに返信されるとお話を伺って、いまどきの学生らしいと思った。
・学生さんの報告を聞いて、日本福祉大学の学生らしさが継承されていると感じました。これをどういった形にし、見えるようにするかも大切だと考える。
・どの話題も興味深いものであった。特に家主さんとの関係は、未知の部分でしたので、生の声を聞けたこと自体がありがたかった。
・この２５年で学生生活（指定下宿）も様変わりしたことをあらためて実感した。全国でもめずらしいこの制度を安心してすごせるメリットとして広く周知できれば、新たな可能性もひらけるように感じた。
・学生の成長は、いろいろな場面で広がるということを松島さん・大家さん・山本先生のお話を聞いて、改めて実感した。学生にいろいろな成長の場を提供していくためには、まずこういった機会に大学構成員がなるべく参加して共有していくことが重要だと思う。

◎初年次教育に対する意見

・初年次教育で掲げられている各種活動において、fuxiを活用するなど「記録を共有」、「成果（output）を残すこと」を意識すべきと思う。
・“生きる”＝生活の部分の力をつけることも大切なのではないか。下宿生の比率がさがり、自立について考える機会が減少していることが、学生層の変化を生んできているのかもしれません。やさしさの基準を議論できる学生集団であって欲しいと感じた。

◎その他の意見・感想

・参加してこうして学生の生の声を聞く機会はほとんどないことに改めて気づかされた。FDとして教育方法について交流することも必要だが、主役である学生を交えた今回の機会は貴重だと思う。これからも、学生が登壇する企画を期待したい。

【学生】

◎きょうゆうサロンに対する意見・感想

・家主組合の方の話がとても興味深かった。大家さんとの関わりが深ければ学生生活も安心できると思う。
・大学生活の1年目は、その後の人生を形成するうえで重要な期間であると考える。人生を基礎的要素を練成するなかで、学校や家主からの支えは必然である。しかし、必要なのは基礎学力を高めることではなく、モチベーションの向上や社会的マナーを培うことが重要だと感じた。
・教員、大家さんから見た学生像をかいま見ることができた非常に貴重な機会となりました。次回も参加したいと思うような場であると思います。

◎１年次の授業で履修したい・したかった授業は？

・学芸会（表現力を培う）
・基礎学力を高める押し付け的教育ではなく、個人の創作的活動から学べる自由な授業により、学力に対してモチベーションの高められる授業。
・編入学をしてきたのですが、最初大講義での授業に戸惑いがありました。
・一緒に仲間と受けれるような授業が欲しい。コンピューターが苦手なのでそういった授業があるとよい。

２．きょうゆうサロン連携企画　バスツアー「知多半島の醸造現場めぐり」開催報告

開催概要

開催内容

テーマ　　　　：「知多半島の醸造現場めぐり」
実施日時　　　：2月16日（月）　9:50〜16:00
見学場所　　　：武豊町里中の味噌・たまり蔵および常滑市古場の酒蔵
主催　　　　　：全学教育開発機構
協力　　　　　：知多半島総合研究所
内　　容　　　：

9:50　集合
10:00　美浜キャンパスを出発
10:30　武豊町のたまりづくり現場①（丸又商店）を見学
11:15　武豊町の味噌・たまりづくり現場②（南蔵商店）を見学
12:30　昼食（盛田「味の館」）
13:30　常滑市の酒づくり現場（澤田酒造株式会社）を見学
16:00　美浜キャンパスに到着・解散

＊　バスでの移動の際に、山本勝子知多半島総合研究所所長代理より知多半島の醸造業および見学先の詳細な解説を受け、各自見学にあたっての視点･ポイントを共有した上で見学を行った。

参加状況

社会福祉学部教員4名、福祉経営学部教員2名、子ども発達学部教員4名、
学生3名（社会福祉学部2名、国際福祉開発学部1名）、職員7名

開催のねらいと評価

今回のきょうゆうサロン連携企画は、「知多半島の醸造現場めぐり」と銘打ち、知多半島総合研究所の協力のもとに、知多半島の味噌・たまりづくりおよび酒づくりの現場を見学し、伝統ある地元の産業を本学の新たな教育資源として捉えることをねらいとして実施した。

今回見学した醸造現場では、発酵状況にあわせて仕事を進めていく昔ながらの手法を使い、手間暇をかけた商品づくりが今日も実践されている。武豊町で見学した丸又商店と南蔵商店の醸造現場では、有機大豆を原材料に使用し、伝統的手法のもとに食の安全に配慮した製品が作られている。安全な食品に関心が高まる中で、このようなものづくりへの姿勢への評価は高く、食の安全を特集した雑誌にも広く紹介されるとともに、製品への国内外の需要も大きい。たまりづくり専門の丸又商店の有機大豆のみで作ったオーガニックたまりなどは、ほとんどが海外に輸出され消費されている。南蔵商店では、味噌とたまりが４対６の割合で製造されているが、中でも「海の精」という高価な塩を使い、年間１桶のみ作られているたまりは、仕込みを行った時点で、すべて買い手が付いているとのことである。

常滑市では、澤田酒造の酒造りの現場を見学した。ここでは、社長自ら知多半島の酒づくりの歴史や原材料である米の品質、酒づくりの工程などについて事前に詳細な説明をしていただき、現場見学の際の専門的な説明についても大変よく理解することができた。

参加した学生や教職員からは、「海外に出荷される特産物がこの地域にあることを知らなかった」「灘の酒と生産量が並ぶ程であったとは、とても驚いた」「学生が地域に直接触れ、地域のなりたちや福祉、産業、文化等との関わりが考えられるとよい」といった感想・意見が寄せられた。そこからは、知多半島の伝統産業の現場を間近に見た新鮮な驚きと、伝統を支えつつ日々の仕事に取組む人々の姿への感動などがうかがわれる。地域の伝統の理解、食の安全など社会的テーマへの関心、ものづくりへの興味関心など、新たな教養教育等の素材として展開しうる可能性を共有する貴重な機会となったものと言える。

知多半島の醸造業について

山本勝子　知多半島総合研究所所長代理

「知多半島の醸造現場めぐり」について

今回の「知多半島の醸造現場めぐり」は、昨今の社会状況の中でも「安全な食」にこだわって企画をした、昔ながらの伝統的な方法で味噌、たまり、酒がつくられている現場を見学する。今回の見学先では、人手や手間をかけて製品がつくられており、製造方法や担い手の人柄を是非、注目して欲しい。製品に対する取扱や想いは、福祉の現場でも活かすことのできる事柄があり、ここから学ぶべき事柄が数多くあるのでそこを受け止めてください。

大学の生涯学習講座の中に「暮らしのアイディアシリーズ　本物の味を知ろう」があり、最初の講義で、食品運動の先頭に立ってこられた磯部晶策さんに「誠実なつくり方をした食品」についてお話いただいており受講生の評判もよい。

アミノ酸含有量の多い「たまり」

出身が九州なので、ここに来るまで「たまり」とはどんなものか知らなかった。たまりとは、３年間大豆をねかし、たるの底からポタポタと出てくるアミノ酸含有の多いものである。これから行く丸又さんのたまりは、そのほとんどが海外で消費されている。丸又商店さんや南蔵さんは、アメリカのオーガニック協会の認定証が置いてあるので見てください。地方特有の食文化を伝える商品を製造している蔵が生き残ってきている。商品は、製造段階で手間がかかるために高価になるが売れている。

鈴渓義塾で地域の教育を担う

味の館には、大学が移転するときから、学生アルバイトが途切れたことがない。学生たちが伝統的にそこでアルバイトをやっていることから、可愛がられているのだと推測でき、そういった関係は、なかなかできるものではない。盛田酒造は、盛田昭夫さんの生家で業績を見ることができる。味の館近くに鈴渓資料館がある。鈴渓資料館は、将来、蔵を修理できる方がいなくなるだろうということで蔵ごと保存のドームにはいっている。明治のはじめに鈴渓義塾ができ、半島の意欲ある子弟がそこで教育されていた。盛田家は、海運業もやっており富の蓄積もあった。地域の銀行の理事長によれば、預金の分厚さは並ではないとおっしゃる。堅実にあゆんでゆく土地柄でバブル期に土地を売ることはしなかった。

知多地域の酒蔵

江戸時代における知多半島の味噌蔵は、２００軒程度、酒蔵が１００軒程度あった。現在では、知多半島の酒蔵が、７軒である。日本の酒造全体が苦戦している状況がある。この間、酒蔵は、規模を大きくするか個性を活かしながら手間をかける蔵のいずれかになってきている。日本各地の自県内の消費率が７０％〜８０％であるのに対し、知多地域の消費率は２３％と低い。

見学先①

合資会社　丸又商店

住所　武豊町里中
URL　http://www.marumata.com

美浜キャンパスを出発した一行は、まず、ＪＲ武豊駅から南に８分程度歩いたあたりにある「丸又商店」を訪問した。「丸又商店」は、文政１２年（１８２９年）に創業され、有機大豆を使ったオーガニックたまりなどを生産している。オーガニックたまりは、ほとんどが海外に輸出されている。

合資会社　丸又商店

代表社員　出口　智康　氏

丸又商店の創業は、１８４３年と町内で一番古い店とされていたが、昨年再調査した結果、創業は１８２９年であることがわかりさらに歴史ある蔵となった。築１００年以上たつという蔵の中に入り、たまりの製造工程を見学するとともにどんな作業をしているかについてなどご説明いただいた。

丸又商店のたまりは、原料として丸大豆を使う。まず、大豆を洗浄し、次に水分を含ませ蒸す。蒸した大豆を玉にしたものに麹菌をつけ３日間温度管理された室で麹をつくる。麹と塩水を桶の中に入れて石をのせて熟成を待つ。熟成期間中は汲みかけという作業を毎日行う。熟成したもろみをスコップで掘り出して、これを布で包み圧搾をおこなう。圧搾工程は、４日間かけてゆっくりとたまりを搾る。濃口醤油の原料は、大豆と小麦を同量使って製造する。それに対したまり醤油は大豆１００％、もしくは少量の小麦を使って造るものと定義されている。丸又商店のたまり醤油は、大豆１００％で造り、小麦を一切使用しない。そのため、旨みの成分は、濃口醤油の倍ほどになり、料理の味は美味しさを増し、調味料としての役割を充分に発揮する。また、小麦が全く含まれていないので小麦アレルギーの方々にも歓ばれている。しかし、すっきりした風味が少ないので好まない人も中にはいるようである。また、料理にたまりを使うと、照りはよく出るが色が濃くなりやすいため素材の色を生かした料理にするのは難しい。甘辛く濃いめの味を好む東海地区ならではの調味料ではあるが、丸又商店の有機大豆を使ってつくるオーガニックたまりは、ほとんど海外に輸出されるとのことである。

見学先②

南蔵商店株式会社

住所　武豊町里中
URL　http://www.minamigura.com/

「丸又商店」から「南蔵商店」まで、町内の「みそ蔵の小経」を徒歩で１０分程度移動して「南蔵商店」を訪問した。ここでは、たまりとみそが生産されている。ここで生産されるみそやたまりの原材料や天候により原材料の値段が大きく変動するなどのご説明いただいた。

南蔵商店株式会社

五代目　青木　弥右エ門　氏

醸造では、麹をつくるのが最優先。全ては、麹づくりで決まるといえる。
蔵人たちは、菌が繁殖する良い環境をつくるために動いている。
味噌・たまりづくりに使う道具は、良い菌を残すために機械を使わず手洗いする。
同様に建物にも良い菌が残されているので大切にされている。

一般に使用される輸入大豆の値段は、１トンあたり８～１０万円で、有機大豆は、１５～２０万円前後になる。
台風の影響を受けると３０万円程度に高騰することもある。
「海の精」と言う１トン１００万円もする高価な塩を使い仕込んでいる商品もある。
全国には、南蔵のたまり醤油を求める方が多数いる。
世界的にスローフードを求める声が増え、ただの調味料だった味噌・たまりが見直されているとのことである。

見学先③

澤田酒造株式会社

住所　常滑市古場
URL　http://www.hakurou.com/

「南蔵商店」からは、バスで移動し途中「味の館」にて昼食をとり、「澤田酒造」にむかう。「澤田酒造」では、酒蔵開放の準備をされている部屋で、酒づくりの歴史や黒板を使って原材料である米の品質、製造工程について詳しくご説明いただき、酒蔵の内部を工程に沿ってご案内いただいた。

澤田酒造株式会社

代表取締役社長　澤田　研一　氏

澤田酒造は、嘉永元年（１８４８年）に創業。江戸時代、酒造りは酒株制度導入の後、元禄９年に蔵の生産量が徹底的にチェックされ、造石税が課されるようになり免許制が完成した。このことにより免許の無い者の酒の製造が禁止され、酒屋の特権が保障される一方、製造から経営にいたるまで幕藩の管理下におかれることになる。当時は、給料が全て米で支払われていたから、米価維持はなにより大切な政治的要素であり、米の需給調節の観点から、秋の収穫量に応じて酒の生産量が定められた。また、秋以降、冬に酒造期間が限定されたため、杜氏制度という農閑期の酒造り集団も生まれてきた。世の中が安定し発展するにつれ、酒の消費量も増えたが、中でも江戸の発展は目覚しかった。元禄１０年、尾張藩から江戸に運ぶ外洋航海の許可が半田、亀崎、常滑に下りるや、尾張藩の保護奨励（税収とともに、酒株発行に伴う権利金目当て）もあり、知多半島には２００軒を越す酒蔵ができ、幕末には灘に肩を並べる全国二番目の生産量を誇った。
現在に目を転じると、清酒の生産は昭和５０年頃がピークで全国に３５７０軒ほどの造り酒屋があったが、その後どんどん減ってきている。知多半島においても、かつての２２７軒から７軒となり非常に厳しい状況である。
そんな中、当酒蔵を存続するためには合理化やコストダウンでは、大手に太刀打ちできないと考え、逆に、人手や手間をかける良質な酒を生産する方向で生き残りを図ってきた。今ではもう他所で見ることができない木製の樽や道具、手間隙かけた良心的な「造り」を継承しているところを実際に見てもらうために、２１年前から、「酒蔵開放」をはじめた。こうした造りに共鳴してくれる方も増えて動員数も順調に増加したが、酒蔵周辺に渋滞が発生したため入場制限のため有料化している。そのかわりに、駅とのシャトルバスの実施、若手作家の常滑焼のぐい飲みを差上げているとのことである。

アンケート

【教職員】

◎学生の教育フィールドとして、どのような活用ができると考えますか。

＊学生が地域の街並みや参照や文化に直接触れて、「わが故郷」との対比をしつつ、地域のなりたち、生活、産業、経済、福祉、文化と自分との関係を考える機会になればよいのではないか。地域の方に大学に来てもらいお話を聞いた上で、見学するとなお探究心が深まるのではないか。
今回参加した学生の感想や期待を聞いたうえ、計画化できるとよいと思います。

＊「地元にいて、地元のことを知らない」と言われますが、今回の企画に参加して、つよく思いました。酒、醤油といずれも現場の様子を身近に見学して、より地元を身近に感じ取りました。

＊学生ともできたら、現場見学する機会を作りたいと思いました。この夏、半田の酢やお祭り・山車のことを調べてきた学生もいましたが、資料だけとか、博物館で見ただけということで、「人の仕事・働き」がなく、残念に思っていましたが、やはり、今回のように身近に「働く人」を感じとることが大事だと思いました。

＊学生を連れていくメリットとして、本物に触れること、地域の一部（一角）に小さくても決意と情熱に充ちた事業所があること、日常当たり前のように接している「味噌、たまり」がどれほどの手間と神経を日々使っているかということを実感する意味は大きい。

＊全学科の教職課程専攻学生は、ゼミ又は講義の中で強制的に連れていくべき。総合学習のヒント、アトピーや食物アレルギーの学生自身及び将来担当する児童・生徒のために化学添加物を入れない食品製造現場を学生のうちに体験しておくことの意義は大きいはずです。ただ、見学後の学生に何をどこまで期待するかをどう設定するかが難しいところではありますが。

◎バスツアー全体に対するご意見・ご感想

＊日頃一緒にならない人たちと時空を共有できたことはすばらしい。できれば、参加者の間でディスカッションの場があればよかったかと振り返ります。
改めて武豊の歴史文化、産業に触れて、「いま」を考えるよいきっかけとなりました。
バスガイドさん(?）の軽妙かつ中身の濃いガイドにも酔いました。
蔵のみなさんの味のある説明にも聞き入りました。

＊企画も、半田の職員や美浜の職員との日頃、ふれあう機会の無い人とも少し交流できたこともいいことでした。また、醤油やお酒の「みやげ」も買えたのも良かったです。

＊「きょうゆうサロン」の企画としてもいいものだと思いました。もっと多様な人の参加にしていくには、宣伝や曜日などの設定に工夫がいるかも。

【学生】

◎大学での学びにどのようにか関わると考えますか。感想など。

＊普段見る事のできない蔵の中を見学できる非常に貴重な機会となりました。長年続いている「ものづくり」の現場を五感を使って体験することで感性が刺激されると思います。また、様々な事に興味・関心を持ち物事に対して積極的に取組む姿勢を助長できるのではないでしょうか。

＊口だけで昔ながらの作り方と言っても説得力がない。やはり、その工程をしっかり見ることではじめて信頼することができる。何事も人まかせにせず、自分自身でしっかり確認しないといけないと感じた。

＊今までに、高山などに酒蔵見学は行ったことがあるのですが、ここまでこだわって、徹底している蔵は初めてで感動しました。蔵の中は寒かったですが詳しいお話が聞けてすごく楽しかったです。甘酒もとてもおいしかった！！また、個人で行きたいな、と思っています。

＊大学の存在する地域で海外に輸出されているような特産物があることを知らなかった。地域の特産物を学生の力をいかして、もっとひろめていくとよいのかも。

＊たまりがこの地方特有の物であることさえ知らなかったので、びっくりしました。安全で丁寧に手作りされている味噌やたまりがあるのに、それらは外国に行ってしまって、あまり国内に出回っていないことが、もったいないなと思いました。もっとたくさんの人に知ってもらいたいです。

＊貴重な体験をさせていただき、ありがとうございました。

見学先等について

【丸又商店】
創業　天保14年（1843年）
蔵の中には、70本もの杉桶が置かれている。
大豆100%のたまりを醸造。
知多郡武豊町里中152
TEL 0569-73-0006
http://www.marumata.com/

【南蔵商店　青木弥右衛門】
創業　明治5年（1872年）
初代　青木弥右衛門（青木藤助）
代々受け継がれた製法を現在に至るまで守る。
3年間かけた味噌づくりを実践。
知多郡武豊町里中58番地
TEL 0569-73-0046
http://www.minamigura.com/

【盛田株式会社「味の館」】（昼食場所）
創業　寛文5年（1665年）
160年前の醸造蔵を改装し、1990年にオープン。
館内には、杉樽が並び隣接した工場で造られた食品が味わえる。
常滑市小鈴谷字脇浜10番地
TEL 0569-37-0733
http://www.moritakk.com/tsuikyu/ajiwau/yakata.html

【澤田酒造】
創業　嘉永元年（1848年）
初代　澤田儀平治
米造から手間をかけた昔ながらの製法で酒を醸す。
清酒「白老」の醸造元。
常滑市古場町4丁目10
TEL 0569-35-4003
http://www.hakurou.com/

３．第４回きょうゆうサロン
「読み、書き、日本語」開催報告

開催概要

開催内容

テーマ　　：　「読み、書き、日本語」～自身の学生生活を１年次から振り返って～
開催日時　：　２００９年２月２６日（木）１８：００～２０：３０
開催場所　：　美浜キャンパス第１教員控室
主催　　　：　全学教育開発機構
協力　　　：　日本福祉大学付属図書館
司　会　　：　吉田直美　全学教育開発機構員
内　容
18:00　挨拶　木戸利秋　全学教育開発機構長
18:05　実践報告①　「秋庭ゼミのゼミ事情」
　　　　　　　　　　秋庭太　福祉経営学部准教授
18:30　実践報告②　「詩の心・言葉をつないで」
　　　　　　　　　　小林信次　子ども発達学部教授
18:55　状況報告　「福祉大生の読書事情」
　　　　　　　　　　坂本聡氏　日本福祉大学生活協同組合専務理事
19:05　実践報告③　「図書館の読書推進・教育連携事業の取組みとこれから」
　　　　　　　　　　岡崎佳子　付属図書館課長
19:30　質疑応答・懇談（軽食を交えながら）
20:30　終了

参加状況

全参加者数　　３５名（報告者含む）
学長、社会福祉学部教員4名、福祉経営学部教員6名、子ども発達学部教員6名、
日本福祉大学生活協同組合2名、職員16名

開催のねらいと評価

４回目の開催となった今回の「きょうゆうサロン」は、大学教育における日本語の読み書きの問題をテーマとして、これについての学生の現状や教育実践への認識を深めると同時に、これらの力をどのように身に付けさせていくべきか意見交換することを狙いとした。報告については、教員の教育実践について２件、関連団体と関連部局報告を２件、計４件にて構成した。

まず、秋庭先生からは、ゼミでの学生指導について大変熱のこもった報告がなされた。特に、webを使ったプロセス管理システムが紹介された際には、携帯電話から書き込みができるか否かがそのシステムの活用度を決めるといった、現在の大学生の「読み書き」への姿勢を暗示する興味深い指摘もなされた。次に、小林先生からは、ご自身の書かれた詩の紹介とともに、詩や小説を授業内で取上げられていることや、本学の学生たちが書いた詩にどのような願いや思いが込められているかについて、丁寧な報告がなされた。先生の感性のみずみずしさが、薫陶を受ける学生たちの試作にも伝わっていることが伺える報告であった。

後半には、まず日本福祉大学生活協同組合専務理事の坂本さんから、生協が独自に収集した調査データや販売データに基づいて、本学学生の読書量・読書時間（全国平均より少なめ）、読書傾向などが詳細に報告された。続いての図書館課長の岡崎さんの報告でも、生協報告を裏付けるような本学図書館の貸出し冊数、よく利用される本の傾向などが、これもデータに基づいて紹介された。さらに図書館独自の読書推進や教育連携への取組みについても報告がなされた。生協、図書館の両者いずれも、長期にわたる学生の読書状況･傾向等データの蓄積を持ち、さらに読書促進の取組みを工夫･実践しているなど、本学教育の向上発展に向けて、よりいっそうの連携を図っていく必要性が示されたといえる。

これらの報告を受けて、参加者からは、「学生サポートの本筋を学べた」「図書館の貸出状況など参考になった」などの感想が出されている。このような感想･意見にうかがえるように、今回のきょうゆうサロンは、本学学生の読書状況への認識を深め、大学教育における日本語の読み書きの問題に関心を寄せる機会となった。また、教職員間、生協と大学間などで教育実践の内容や読書傾向データを共有しつつ、盛んに交流することができたともいえる。今後も、本学教職員のみならず、学内外の諸機関･諸団体との「きょうゆう」の輪も広げつつ、今日の大学教育に関わる重要なテーマのもとに全学FD推進事業の一環として開催していきたいと考える。

3 読み、書き、日本語

実践報告①「秋庭ゼミのゼミ事情」

秋庭太　福祉経営学部准教授

大学における専門演習の役割には多様な考え方があるだろう。実践的な内容を重視するゼミもあれば、資格取得を重視するところもある。大切なことはハードに勉強する中で自分自身としっかり向き合うことなのだろうと考えている。

秋庭ゼミはどちらかと言えば基礎能力の向上を重視している。ゼミのミッションは「研究活動を通じたゼミ生全員の能力の向上」であり、ITを活用して学生と教員間のやりとりを極力システム化することで、国立大学に比べて多いゼミ生全員をカバーすることを目指してきた。連絡用に携帯電話のアドレスは100%管理されており、過去の先輩の発表や卒論、各種の申請書類、スライドファイル、指導用のゼミマニュアルなどはすべてデジタルファイル化され、ゼミ生向け共有サーバーにアップロードされている。秋庭ゼミの学生はだれでもいつでも、それらのファイルにアクセス可能になっている。

これらの資料を使って下級生は自主的に発表準備を進めることになるが、もちろんそれだけでは十分なクオリティにならないので、発表予定の最低1ヶ月前から週1回の事前指導が学生に対して義務化されている。そのため多い時には週に20-25回程度の事前個人指導を行うことになるが、会議と講義の合間を縫ってなるべくたくさんの時間調整をするため、携帯電話をつかった相談予約システムを導入し、当日の朝一番には、どの時間に誰が来るのかということを確定し、なるべく無駄な時間を作らないようにしている。この相談予約システムはフリーのUNIX用CGIスクリプトをベースに、半田キャンパスの大場研究室の協力で開発したものである。

また、これだけの人数を一気に相手にすると、学生に対しておこなった注意や指導、指示の内容を覚えていることが難しくなるので、学生ごとにカルテをつくり、個別の指導内容などをすべて記録している。これも2008年度からUNIXの掲示板スクリプトをつかって、ネットベースのカルテに移行した。私の記録の内容はゼミ生にはすべて公開されており、ゼミ生は携帯電話からカルテの記録をいつでも確認することが可能である。

以上が事前指導のための仕組みである。ゼミは2-3年の合同、連続2コマの180分で、最大4名、1名あたり持ち時間45分で、発表とディスカッションが発表者の時間内でのタスクとなる。

しばらくしてからわかったことだが、この180分の学年横断の合同ゼミは、上級生のやり方を見て学生が学ぶと同時に、下級生の進歩を見て上級生が焦るというとても良い形の相互学習効果を生み出す。上級生と下級生の人間関係および協力育成の関係も生まれるので、しばらくしてから教員の仕事量はかなり減少した。ゼミ内で取るべき規範的行動も、上級生の行動を通じて徐々に浸透していくため、こちらが口うるさくいう必要もぐっとへるのである。

以上の仕組みは「どこまで自分一人で出来るのだろうか？」という個人的な興味からスタートしている。組織論が専門分野であるため、40名をどれだけコントロールできるのかという気持ちもあった。結果的に私の予想以上に学生は成長してくれた事になる。なかには大学院でケースとしてつかえるだけのデータを集めてくる学生もおり、成果は極めて高いと自負している。

しかし、数年かかって作り上げた、この仕組みも来年度にはどうやら辞めなくてはいけないようである。来年から、新学部のゼミがはじまると、この秋庭ゼミの仕組みを支えていた中教室は有無を言わせずそちらに優先的に配分されるため、福祉経営学部の秋庭ゼミにはまわってこないらしい。2009年度は学事課がなんとか確保してくれたが、来年度はもう無理なようだ。上級生と下級生の学びあいが崩れてしまえばこのシステムは機能しない。現状の私のスケジュールでは維持が精一杯で、再構築は難しい。最後の年を精一杯やりたいと思う。

実践報告②「詩の心・言葉をつないで」

小林信次　子ども発達学部教授

私は、いくつかの詩が、学生の心に残ればよいと考えています。今年のアカデミー賞は『おくりびと』が受賞しました。私の詩の作品の中にもやがて人は死を向かえるであろうことを書いています。それは、私の詩集『この星の呼吸』（たんぽぽ出版）の中にある「いつまでもあなたと」を読んでもらえると理解してもらえるのではないかと思っています。

特に「たとえとぎれとぎれのときが近づいたとしても　あなたのはてしない想像と冒険はどこまでも続いていくでしょう」と書いています。これは、私は今生きているから言えることです。そして「いつまでもあなたと」という詩は、「いつまでもまとわりつくように現れる人」との出会いと別れについて書いたのです。二つの詩に死と別れを込めたのです。今年のアカデミーでもう一つ注目したのは、映画「タイタニック」で主演していた有名な女性で、主演女優賞の『愛を読む人』です。私は、この作品『朗読者』は、５０歳を過ぎてからはじめてこの本を読んだのですが、世界ベストセラーで優れた作品です。私もこういった作品を書きたいと考えています。小説の後半は、ドイツのナチスとのかかわりについて書いてあります。私も歴史の中で生きている作品を書いてみたいと思っています。

福祉大学にもさまざまな学生がいます。学生の素朴な思いを整理しますと、資料で取上げている「大学生の声から」を一読してください。これらの声は、「自分の時間が欲しい、ロッカーを持ちたい、たくさんの人と出会いたい」ということです。突き詰めれば、「学費やアルバイトに追われ過ぎている自分や大学への願いだと思います。

私の詩集には、日本福祉大学の学生のことも入れています。例えば、社会福祉学部の春季ゼミのキャンプファイヤーの場面は、「夜空のかなたへ」の詩です。この時の情熱は、多くの時間が流れても残っていくものであり、途中で退学した学生もこの時のことはしっかり覚えているということでした。詩集の「ある若者」では、日本福祉大学とは書いていません。これを読んだゼミの学生は、突き動かされたようでした。いろんな学生に出会いました。ある時からゼミの１人の学生が来なくなったことがあり、その学生が気になり午後３時くらいに尋ねてことがありました。夜のアルバイトでぐっすりと寝ていてふとんから出ようとしませんでした。それでもその学生は、「夕方の授業から出るつもりだ」と言っていましたが…。

私の詩や『子どもと一緒に読みたい詩』（たんぽぽ出版）などの詩を毎回のゼミの授業で学生に５、６篇読ませてきました。最初は、学生は朗読の声に元気がなかった。ゼミ長から、「先生は、上手に読めるが、どうしたらうまく読めるのか」と言われたこともありました。いろんな詩に巡り会えてよかったという感想もありました。

子ども発達学部の学生で、「詩づくり」に取組んだことがありました。ところが自分で書くとなると現実と書く内容が飛躍するのでなかなか書けないのです。小学校生の場合は、ストレートに表現し、「テレビ」でもおもしろい詩になります。でも、学生の自分の心理状態や苦し紛れにつくった詩の中にも、一定の学生の心理が浮かんでいます。ゼミの夏休みの課題として俳句や詩を書いてもらいました。

聴覚に障害がある学生が、詩だけで１０篇ぐらい書いてきました。障害を持ちながら、回りの人と関わっていて、人との関わりをきちんと詩に込めていました。レポートや論文から学生を見つめる方法もあるし、詩の中から読み取ることもできます。

最近、『蟹工船』が話題になっていますが、私もそれに近い小説を書いて学生に読んでもらったことがあります。学生の感想に鋭い感性を感じ取ることができました。「自分史」の中に自分のことを書くこともあります。小学校でいじめられていたことなどを書いている学生もいます。私は、傷ついている学生の内面や多くの学生の心がどのように写っているかを詩で描いていきたいと思っています。

状況報告「福祉大生の読書事情」

坂本聡氏　日本福祉大学生活協同組合専務理事

　今回報告したいのは、３点です。今回、お示ししたデータは、学生生活実態調査をおこなっていますので、こちらのデータを使用しています。
　アンケートの回答によれば、３４，５％が読書時間が０％で、日本福祉大学の場合は、４割以上が１冊も読んでいないことになる。カテゴリー別に分けると学習や研究にかかわる本と雑誌については、傾向がほぼ同じである。雑誌については、読んでいない。ここ１年で１位から４位がノンノとなっている。漫画かファッション誌が多くなっている。
書籍の購入冊数の比較をおこなっており、勉学研究以外の書籍購入数が、全国平均が１．９冊に対し、福祉大生が１．５冊という結果が出ています。
書籍の購入金額は、全国平均が２，３２０円であったのに対し、福祉大は、１，６００円で全国平均と比較するとかなり低い状況である。福祉大生が回答したアンケートは、人によっては講義テキストも含んだ金額を記入していることもあるようです。
　次のスライドは、福祉大学での書籍売り上げランキングで、３、４、１５，１７、２１、２２位の書籍が、資格や公務員試験に関連するものであり、就職関連のものは、全国平均とあまり変わりがない。
　生協では、卒業までに１００冊読みましょうと学生に呼びかけて、読書マラソンを実施しています。これは、本とセットで学生自身が学生に対して本を紹介する取組みで生協で買った本でなくても良いこととしている。ただ、本を良く読んでいる学生との２極化が進んでいる。
　書籍の売り上げについては、１，０００万円強になりますが、学生数で割ると２，０００円程度になるのが現状である。

実践報告③「図書館の読書推進・教育連携事業の取組みとこれから」

岡崎佳子　図書館課長

１．学生の利用状況について

最初に学生の利用状況について紹介する。まず、本学の2007年度の院生を含む学生一人あたりの平均貸出冊数は９冊である。これは私立大学の平均の7.4冊と比べて高い水準にあり、近隣の大学でも愛大、南山、愛知淑徳大に次いで4番目となっている。しかし推移でみると減少傾向にあり、とくに学習用PCを図書館に配置した2006年度以降の減少が顕著になっている。（PCの配置は、従来の資料を借りて自宅でレポートを作成するといった学習スタイルから館内のPC席に資料を持ち込んで学習するスタイルへと変化をもたらしている。）

次に学生の利用が二極分化している状況を踏まえ、平均的な学生がどの程度本を借りているかという中央値でみると、本学の学部生全体の中央値は年間3冊に止まっている。3冊がどの水準にあるか他大学との比較はできないが、大学あるいは学部としての目標を掲げる必要があるだろう。

また、深刻なのは年間を通じて図書館の本を1冊も借りていない学生が34％存在する事実である。この全学生の3分の１の非利用層に今後どのように働きかけていくか、これまで以上に教育と連携した取り組みが重要になってくると思われる。

一方、本をよく借りている学生層をみると、最多貸出は福祉経営国際マネジメント学科2年生の247冊。専門書、哲学、歴史、政治、自然科学、文学、実用書などあらゆる分野の本を借りている。そのほかにも100冊以上借りた学生は10人、50冊以上借りた学生は104人となっている。参考までに貸出上位者と成績との相関関係を見たが、貸出上位者のほとんどはGPAにおいても高位を示していた。

次にどんな本が良く借りられているか、今年度1月末までの利用ランキングは資料2、3の通り。総合ランキングではやはり美浜、半田ともに専門書が中心となっている。また文学分野のランキングでは、ほとんどが映画化、ドラマ化、アニメ化された本となっており、この傾向は、「第62回読書世論調査」（毎日新聞）の若者は「映画やテレビでヒットした本」を手に取るという結果とも一致する。ちなみにこの調査では、若者が本を手にするきっかけとして前述以外に「学校で話題となったもの」「身近な人から薦められた本」を挙げている。読んだ本について学生の間で日常的に話題となるような仕組みづくりに今後図書館として取り組んでいきたい。

２．付属図書館における読書推進の取り組み

続いて、これまで付属図書館が行ってきた読書推進の取り組みを紹介する。図書館では、学生生活や社会のトピックをテーマに取りあげて関連する本を展示したり、図書館報『える・こんぱす』において先生方が「学生へのお勧め本」として紹介した幅広い分野の本をコメントとともに館内に展示するなどしてきた。また、今年度から図書館セミナーのアンケートに「あなたのお勧めの一冊とその一冊に関するコメントを記入してください」という項目を付帯して回答してもらっている。必須の回答項目でないにも関わらず、概ね8割の学生がこの質問に回答している。中には、秀逸なコメントを書く学生もおり、今後の読書推進の取り組みに繋げていきたいと考えている。

また、図書館では3年前からマンガコーナーを設置している。図書館にマンガを置くことについては賛否両論あるが、本をあまり読まない層に対しての呼び水として『三国史』などの歴史マンガや『まんがで読破・カラマーゾフの兄弟』など文学の案内書的なマンガを中心に配架しており、学生の人気のコーナーとなっている。学生からはマンガをきっかけに原作本を手に取ったという声も聞かれ、実際の貸出状況を見てもマンガに引き続き原作本を借り出している状況が窺える。

３．付属図書館における教育連携事業の取り組み

次に図書館の教育連携事業について紹介する。教育連携事業については、主に正課授業における利用者教育、図書館利用セミナー、講義推薦図書制度、学部教育と連携した文化企画を実施している。

正課授業では、従来実施していた「情報処理演習」（美浜）、「基礎演習」（半田）における利用者教育に加え、担当教員からの依頼により今年度初めて子ども発達学部の「こころとからだ」において利用者教育を実施した。内容は「情報処理演習」や図書館セミナーなどと重複し

ないよう児童書のブックトーク（特定のテーマに関する何冊かの本を批評や解説を加えながら紹介）なども交え、翌週までに必ず図書館で本を借りて児童書を読むこと、さらに読んだ本のブックレビューを書くことを課題として出した。資料１のように、こども発達学部の１年生の利用は他の学部と比較して群を抜いて高く、１年生の早い段階で実際に本を借り出すといった課題の取り組みがその後の利用に大きく結びつく結果となった。

図書館利用セミナーは、ゼミ担当教員からの申し込みによりゼミ単位で実施している。ステップ１は1年生対象に基本的な図書館の活用方法を、ステップ2、3は2年生以上を対象にゼミのテーマに沿った資料ならびに情報収集の方法について演習を行いながら実施している。昨年度、ステップ1は39ゼミで実施（１年生の参加率は67％）。ステップ2、3は48ゼミで実施した。また昨年度全学的に実施された１年生のゼミアンケートにおいて図書館セミナーに対する学生の満足度が高いといった結果が出ている。ステップ１は大学の学習生活において自発的に本を借りて「読む」ということの意味付けをアピールできる良い機会でもある。そういった視点でぜひ今後も積極的に活用していただけたらと思う。

講義推薦図書制度は、本来授業内容を理解するために教員が図書を指定して、「読むことを学生に義務付ける制度」である。例えばリベラルアーツの取り組みで注目されている国際基督教大学では、授業前後の自主学習を要求するプログラムが実施され講義推薦図書制度と密接に結びついており、学生１人当たりの貸出冊数も62冊と全国で1位２位の高い水準にある。一方本学の場合、昨年度講義推薦図書のうち5回以上借り出された図書が美浜6.1％、半田5.6％。一度も借り出されていない図書は美浜で35.2％、半田で59.4％と利用度がかなり低い。本学においても講義推薦図書制度が「読むことを学生に義務付ける制度」として再認識される必要がある。なお、2009年度からはシラバスに示された講義推薦図書のタイトルをクリックするとそのまま図書の予約ができ、教員が入力した推薦コメントをWEB上で参照できるようシステムの整備を行った。これを契機に講義推薦図書制度が有効に活用されることを期待している。

図書館の文化企画は、これまで地域貢献に主眼が置かれていたが、今年度は教育連携に視点を向け国際福祉開発学部との共催というかたちで実施した。「途上国に絵本を届ける活動の紹介」と題した講演とボランティア（日本で出版された絵本にクメール語の訳語シールを張る）体験を企画し、国際福祉学部のカンボジア研修に参加する学生が当日スタッフとして運営にあたった。また、国際フィールドワークの研修プログラムの一環として、作成された絵本はカンボジア研修の訪問先の孤児院に学生の手で届けられた。研修終了後、名古屋市内の小学校の授業でカンボジアの子どもたちに絵本の読み聞かせを行った経験などを学生たちが話す機会を得るなど、学習活動のひろがりにもつながっている。

なお、この企画は教育連携事業であると同時に読書推進事業でもある。企画にあたって、途上国へ絵本を届ける活動を知ることを通じて、本という存在の豊かさ、教育・文化の発展に果たす「本」の役割の大切さを見つめなおす機会としてもらいたいというメッセージを込めた。参加した学生からは「文字の力、絵本の力を知りました。」などの感想が寄せられている。

４．付属図書館の今後の取り組み

多様な学生を受け入れる中で、これまで以上に教育との連携を深めつつきめ細かな取り組みを行っていく必要がある。付属図書館では、今後の取り組みとして現在以下を検討している。①学部推薦図書制度。例えば学部で専攻領域への関心を高めるような比較的読みやすい本を推薦していただき、図書館にコーナー化する。一方、学部においても導入教育のツールとして活用していただくなど、具体的な活用方法も含めて検討したい。②早期入学決定者に対する入学前の学習支援。早期入学決定者に対して図書館の利用や図書の貸出などのサービスの提供を行うとともに①で示した学部推薦図書を紹介するなど図書館としても入学前学習を支援していきたい。そのほか③ゼミやサークルなど各コミュニティ（fuxi）　への個別的な情報提供。④学内諸機関と連携した読書推進事業の展開⑤図書館の企画に関わってもらう学生図書館サポーター制度の新設など。

今後も、付属図書館として教育改革を積極的に担う取り組みを展開していきたい。

参加者の感想

◎本学の「読み、書き、日本語」の取組みについてのご意見

＊本を読む、学ぶ、動機付け、指導する、意欲づけ、みなさんの工夫に感服します。携帯の使い方、詩の心は、素晴らしかったです。

＊秋庭先生の話は、学生サポートの本流を学ばせて頂いた感があります。小林先生の感性に乾杯。図書読書のあり方については、有益な注意喚起をいただきました。

＊多様な教育の多様な取組みを知ることができました。「読み、書き、日本語」のテーマから予想される内容とは若干違ったようにも思えますが、それはそれで結構でしょう。

＊ゼミ指導の実態や現状、あり方についてインパクトをうけました。

＊もう少しディスカッションの時間が取れるとよかったと思います。

＊具体的な取組みから、来年度のゼミ運営、授業のアイディアをいっぱいいただきました。

◎きょうゆうサロンに対するご意見等

＊大胆に自分の教育や存在をアピールできる場として、ユニーク（おもしろく）運営を考えていきたいものです。

＊さらに面白い企画を極めて下さい。

＊もう少し、きっとone speakerの持ち分をもう５分か、４本を３本にすると良いのでは

＊照明がflatすぎる。暗い方が良いと思います。

＊学生の視点からの報告と教員側の報告を合わせて聞けると面白いと思います。

＊初めて参加しましたが、アカデミックかつなごやかなサロンだったと思います。運営に関わって下さったすべての皆様に感謝申し上げます。

編集後記

お忙しい中、原稿の加筆・修正を急遽お願いすることとなり、また、短い期間で点検していただき誠にありがとうございました。全学教育開発機構の報告誌「きょうゆう」として、第１号に引続いて第２号を発行することができました。この場をお借りしてお礼を申し上げます。全学教育開発機構も來年度より新体制となり動きはじめます。何かとご協力をお願いすることになりますが、今後とも、ご指導のほど宜しくお願い申し上げます。（S）

日本福祉大学 全学教育開発機構 報告誌
「きょうゆう」
第２号
2009年03月

日本福祉大学
全学教育開発機構